

第16回日本語大賞

特定非営利活動法人日本語検定委員会



高校生の部 優秀賞 受賞作品

『いにしえの花』

東京都
東京都立両国高等学校
二年 稲葉 理乃

いにしえの花

東京都立両国高等学校 二年
稲葉 理乃(いなば りの)

土地が昔から人々と重ねてきた歴史という意味でも、現在個々がそこで重ねている経験という意味でも、そして、歴史や経験が未来、積み重なっていくという意味でも、広い意味で「私のまち」を表しているのは「積み重ね」だと思う。そしてその「積み重ね」を美しく詠んでいる歌がある。それは私の好きな百人一首の「いにしへの奈良の都の八重桜 けふ九重にほひぬるかな」という伊勢大輔の歌だ。いにしへの奈良の都に咲いていた八重桜が、今日は新しい都の宮中(九重)で美しく咲き誇っていますよ、という意味の歌。これは奈良の八重桜が宮中に献上されたとき、受け取り役を譲られた伊勢大輔が、藤原道長に即興で歌を詠めと命じられ見事に詠んでみせた歌だ。いにしへの奈良の都で積み重ねられてきた歴史と栄華を思わせる八重桜が、今度は京都で美しく咲き誇り、新しい都での栄華を予感させる。私はこの「いにしえの花」が、人が住む場所で「積み重ね」ていくことをもつとも美しく表した言葉のように思う。

私の住む葛飾区の、区を象徴する花は菖蒲だ。それは堀切に有名な菖蒲園があるからだ。その菖蒲園は、江戸末期に生まれてから、明治維新、関東大震災や戦争など、人の営みと密接に複雑に関わり合ってきた、それらを経て今も人々の遊山の地になっている。昔から咲いていた菖蒲が、これからを匂わせる。葛飾区の菖蒲は、桜ではないけれども、人々にとつて「いにしえの花」だ。

そして、私は葛飾に住んで、楽しかったことや、悲しかったこと、嬉しかったこと、腹が立ったことなど、いくつも積み重ねて今の私を作ってきた。私が住んでいる町は、特に観光地でもなく、大きな伝統祭りだとか、何か遺跡だとか、そういうものもない、万人にとつて価値のある場所ではないかもしれない。しかし、私という人間に不可欠な経験と密接に複雑に絡み合ってきた、なくてはならなかった大切な場所だ。もしこの先ここから離れたとしてもその思い出は持つて出ていく。その経験でできた私がまた、新しい場所で思い出を積み重ねていくし、思い出と共に住んでいたこの町のことを思い出すだろう。また別の場所でも咲く八重桜のように続いていく、これも立派な「いにしえの花」に違いない。

個々が積み重ねたことをまた積み重ねてまちは出来る。幾重にも折り重なっているのが、まるで花びらが何十枚も重なって大きな一輪を咲かせる八重桜のようだ。

いにしへの奈良の都のようにには栄えてはいないし、八重桜のようにには誰もが美しいとは思えないかもしれない。けれども幾重にも紡がれてきた歴史や経験は今も土地や人の心に残り、人が生きていく限り、これからも幾重にも何かしら積み重ねられていくのだろう。そして「いにしへ」の歌が詠まれたように、積み重なってきたこと、積み重ねていくことに想いを馳せる心は、いにしへの頃からずっと変わらず人々の中にある。

人の存在の限り、「いにしえの花」はいつの時代もどの場所でも、誰かの心のなかに美しく咲き誇っているものなのだろう。